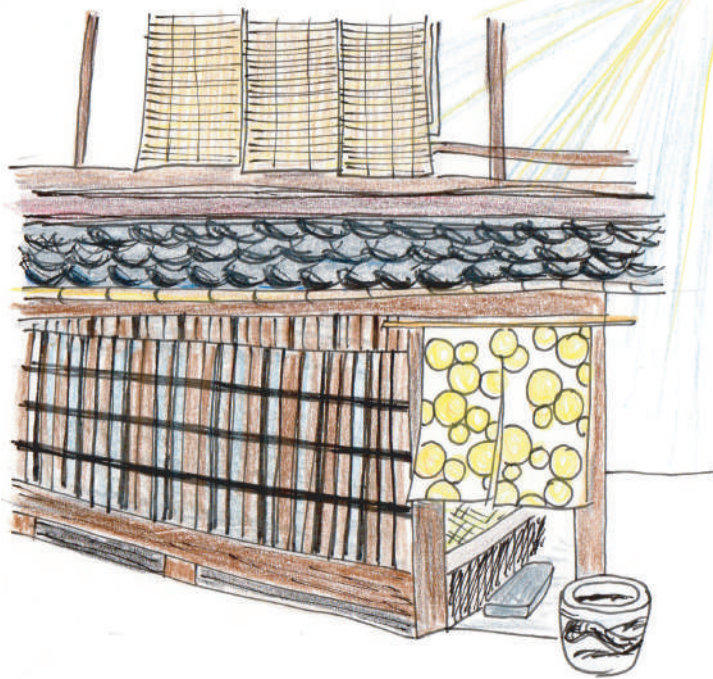


みのまわり

①

京都に引っ越してきたのは二〇一二年の春。その前の年の秋に新居探し。たくさんの寺社仏閣と紅葉広がる北区に一目ぼれし、



「新婚さんやし、新築がいい！」と半ば強引に鷹峯にある新築マンションに住むことに。

マンションの管理人さんと、時々会うお隣さんとのご挨拶。

その他のマンションの住人、地域の人とも交流はなく、そのまま一年半が流れた。

「町家に将来住みたい」

偶然にも、それが私たち夫婦の夢。今後のことも考え、二〇一三年秋、築76年の町家に引っ越すことに。

長屋で、キッチンが傾き、扉は閉めても閉まっていない。イタチの走る音も聞こえる。・・・でも・・・なんだか心地いい。

「いってらっしゃい」「おかえり〜」「今日は定休日やな！」と、まるで家族のようなご近所さんとのやり取り。

家の中にも、外の会話やお向いさんが毎朝バイクのエンジンに手こずる様子が、すぐそばで起こっているかのように聞こえる。家をたずねた時は、戸を開けたまま、玄関の中までしっかり入る。|こんな生活、わずらわしい？

暮らすこと。

人は、一人では生きていけない。恋人、同僚、家族、そして、同じ土地に住む人。

忘れられかけている暮らしの形が、昔の町家を軸に存在し、言葉にはできない安心感がそこにはある。

私たちが生まれるずっと前からの、人の想いがそこには込められているのかもしれない。

同じ土地で、同じ空を見上げる人たちと、これからも一緒に毎日を生きていきたい。

二〇一四年八月 やまさきさちちよ